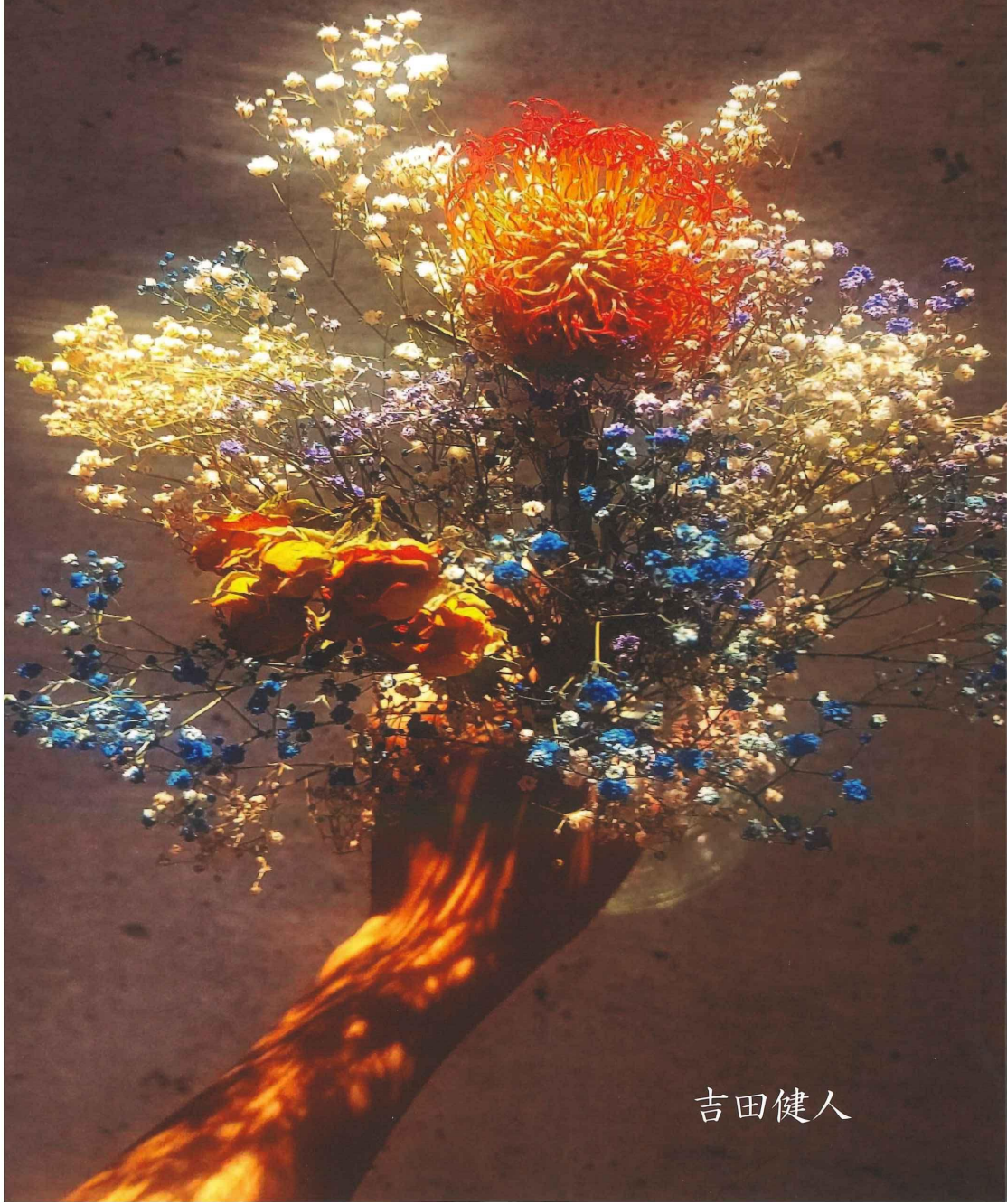


Bouquet de poèmes



吉田健人

Bouquet de poèmes

吉田健人

目次

氷点華

鬼と花

絶えた根／種

赤子のひま漬し

へ前近代的な花火のへ時間

薄命の先に

ある宵を境に

幸福な被害者

ねむけ

28 26 24 22 18 16 14 10 6

Mother's day

Father's day

雨の日の小休止

逸脱なかま

38 36 34 30



Bouquet de poèmes

氷点華

雨降る夜の東京は冷え込むらしい

交差点に溜まっていた人混みの残り香に飲み込まれて

次の一步の踏み出し方がわからなくなった

拍子

何かが俯いた私の目の前を はじけとんだ

トンボだ 親子トンボだ

こんな季節になぜ

そもそも――

暗くて

寒い

夜

空も 不安に なったのだろう

街の音をかきけす雨は

氷点の名を冠する芍薬の花びらにいつしか変わっていた

自分より弱くてかわいそうな人を見つけて優しくすることで自尊心を満たしてるだけの人間関係に
足を拘われた幾十年

赤信号の下に蹲るあの男が見えるか

ほら あそこで震えている小さなその人の弱弱しい背中を

淡白い氷点の花びらがそっと撫でた

東京の真ん中にしんと降り積もる百花の星

老いが微かにくゆる線香の煙が

一から天の川をつくるようにたなびく

川面は芍薬燦々で目を奪われる

ああ私の動脈を鯉がおよいでいる

鯉は蛇に変わる

その牙は誰かを嚙もうとしている

未練なんて一つもないのに

手先と目元は次第に熱を帯びて

いちばんすきななはなに誘われた嗚咽がこだまをはじめ

鬼と花

炭坑の街にて

わたしの夢がお花屋さんだったころ

かわいい夢とみな興味なさそうな顔をして言った

ニコニコすることしか能のないわたしは

目の前の無関心が怖くて純情を捨てたくなった

大人にならずとも

安定と退屈はすでに抱き合わせで

言葉にならない感情の海に

風呂場で剥がしたバンドエイドが所在なく浮いている

わたしの言葉はわたしを守ってくれない

苔のおすまで

わたしの夢がまだお花屋さんだったころ

朝早くに登校して

花壇のチューリップを世話しながら

前方に佇む美しい青をいつも眺めていた

歩調を合わせることを知らない彼は

異国からやってきた鬼神のごとき青二才で

灰色の街に

波風を立てた

揺れる

春の日差しと花の中に息づく命の灯

熟れた鬼灯みたいに赤く染まったわたしの頬

咲かんとする蕾たちの土を弄りながら

漂流する半地下のモグラ

長く暗いトンネルの中で

器官を抜けたせぬ声と

立ち往生する夜行列車を背に
ヴァポレットが勢い良く警笛を鳴らし進んでいく
桜の花筏のうえ

絶えた根／種

白い影と疼痛 黒い枕に

あの子のお母さんとお父さんは病院で働いているから

あの子と遊んじゃダメ

そう言ったのはわたし

はるかに悪しき腫瘍は——私は愛娘の癌なのか

どんどん軽くなってゆく

やめて

おまえが二度と子どもを産めなくても

誰も困らないなんてそんなこと言わないで

昏い夢に酸欠 暁る朝

どろりとどろりと何かがうごめく

流れ出ているのか 流れ込んでいるのか

もうがらんどうなはずなのに

赤子のひま潰し

粘りつくような雨が降っていた心地の良いあの日
わたしをパーカーのポケットに隠れて桂川に身を投げました
どぼん

水圧でポケットからたちまち押し出されると

奔流に弄ばれる父の姿がそこにあります

まるで水中世界に突如もたらされたオルゴールメリーみたいで
無垢なわたしはすっかり魅了されてしまいました

こんなにも幻想的な光景を見せに連れてきてくれるなんて
やっぱりお父さんはすごい

憧れちゃいますね

傘なんかさして馬鹿みたいなんてさっきまで思ってたこと
わたしとあなただけの内緒ですよ

ふふふ ふふふ ふふふふふふふ

恍惚としていたのも束の間

わたしは川底に眠る岩に激しく叩きつけられて

口から空気がごぼごぼ溢れます

少し賑やかにしすぎたために肅清されてしまったのでしょうか

天井からお父さんがこちらを眼差しています

わたしだけのメリー

再び回り出すのを待っていましたけれど

待てど暮らせど

岩と川底に潰されたまま身動きがとれません
わたしはそろそろ退屈しはじめていました

ほらあなただって退屈しているでしょう

誰も退屈から逃れることはできません

厭きは死に至る病なのです

〈前時代的な花火の〉時間

さてお立合い、御用とお急ぎでない方はぜひお目通しいただきたい。

すき、すき、すき、大好き、大好き、大好きだよ、あなたが言葉での愛情表現を求めてるって知ってるから、きらきら法学徒の僕はばつときらめえて輝くようになりギャルマインドで応えてたつもり！

だって「す」と「き」を順番で並べて置くだけで良いんでしょう？それで時々強調を足せば良いんだから、時々あなたの名前を前か後か両方かに付ければ良いんだから、そんなのいくらでもいると思ってた

でも不思議 言葉って感情と結びつかないと出てこないのね
即席の恋愛関係

だ、から、かな、歩きながら別れ話を切り出したときにキューピー三分クッキングのメロディーが
あたまんなかのどまんなかで流れ出したのはき

じゃああなたはって別に聞いたりしないけど、いとやんごとなき家の娘だからブラームスの愛のワ
ルツでも流れているのかもね
洒落くさい

ところで、僕のいる大学は金持ちが多いと巷間広く言われている、金持ち庶民の境界はシャンプ
ーを流した後リンスをつけようと思っていたのに誤ってもう一度シャンプーを出してしまったときの
行動に表れるものだ、金持ちはそのまま流す、庶民はもったいないので清潔な頭皮をもう一度洗
う、これが金持ちと庶民の揺るぎないフォッサマグナである、ちなみに僕はもちろん後者だ、とい
う話をかけがえのない友人にしたら、その人は特筆すべき美貌を兼ね備えた同級の女であったのだ
が、身体を洗うという想定外の返答をされたしまった、この世の多様性をよもやこんなところで痛
感するとはおもいもしなんだ、新しさを見せてくれる本当にかけがえのない友人である

閑話休題、そう、この詩は僕といとやんごとなき娘とが人生のある時期、ある瞬間において線を重
ねてその重なりが有料道路と下道みたいに離れていくハナシ
愛情の不在を額面で覆い隠すようにプレゼントは「ブランドもの」ばかり！

ブランドがブランドたる所以も知らぬままに「」つけてする応酬、そんなやつらが一番かっこつけ三分クッキングが終盤に差し掛かったころ、僕とあなたの間は点字ブロックに引き裂かれた、万里の長城やベルリンの壁を前にしてもこれほどの大いなる隔たりを感じはしないだろうね
もう終わりの近いし最後にもう一興松屋のつゆだく牛めしに関東ローム層くらい馬鹿みたいに大量に七味をかけていた時にaikoの「花火」が聞こえてきて
ふいに目頭が熱くなったりする

そんな瞬間にセン、ちな不自由が僕の中に潜んでいることを知ったんだ
あなたに言っても怪訝な顔されるだけだろうから別に言わないけど
頭の中ではこんなにも花火がはじけてる

あーあ自由の漢字って隙間に添加物がたくさんつまっててほんと窮屈そう

薄命の先に

つよくかほりをはなつはな
ひとしおなびやかなみめかたち
されどひどくきずつきやすくせんさいで
すぐにしおれてしまう
かほりですべてをうめつくすことに
いのちのほとんどをつかってしまうから
イヴ・ピアッチェというバラ

彼の教え通り花は一週間もしないうちに枯れた
全部で九本あったけれど
まるで一人取り残されることに怯えるように
一つが枯れると続々花びらを落としていった朝

ダマスクモダンの香りだけ部屋に残して
イヴ・ピアッチェというバラ

ある宵を境に

ある宵を境に街にはふわあと鼻をつく甘く優しいかほりが溢れかえる
この時期だけはわたしの初めてののすべてを捧げたあの人のことを思い出して
声を潜めて独り泣く
この世界のはずれで起きる誰も知らぬ格闘
その戦いにわたしは負け続けた

季節にはその季節だけの空気があるけれど

秋のはじめといえはやっぱり金木犀

それは彼が好んでつけたかほりで

私を包み込んだかほり

ある宵

ふたり溶け合って真っ白な部屋をオレンジ色に染め上げる夢を見た

夢は 手垢のついた窓にびしびし激しく打ち付ける雨に遮られた
まっしろなベッドからぬるりと抜け出す
きつと明日には街の空気がオレンジに染まるだろう
そしてわたしはすべてを思い出して
また独り泣く

ある宵を境に

幸福な被害者

幸福な被害者は私だった

血統書付きの花々に囲まれて迎える終着駅

そんなものを思い描いていた

忘却の濾過槽から掬いあげたものは

たしかに綺麗な思い出

あの人が私に施した執拗な仕打ちが細やかな網目をすり抜けることはなく
今の私は

あなたが注いでくれた小さく僅かな愛情だけで満たされている

この世に生まれ落ちた時から何かに覆われている感覚があり
(その正体は判然としないけれど)

蔓バラで編まれた刺々しい鳥かごのようなsoliditéと午前二時半の霧のようなvariabilitéが妙なる具合
に入り混じっていた

一度羽ばたきかけた心をあなたに悟られたくなくて

そっとスパイラルに組んでいく

恵まれるものと恵まれないもの

奪い取るものと奪い取られるもの

五つの時 生存のためにコッペパンを盗み雑踏の中で辛酸と一緒に食った

外聞や呵責はつゆも気にならなかった

なのに

あの人の墓石に少しでも上等な花を供えたくて

煌びやかな街からいかにも健康そうな血統書付きのリシアンサスとカスミソウを盗んだ時

ひどくひどく惨めな存在に堕ちてしまったと思った

私だけが

(花泥棒)

幸福な被害者だった

ねむけ

ちかちかちか

くらくらくら

目の前がぼやけて文字の輪郭が泣き始める

軽く触れただけでひび割れてしまいそうな薄い手足

吸い込まれるように引き寄せられるように

還るべき場所がある

カフェイン

この身体の主は還ることを望まない

Mother's day

紫陽花はまた咲かぬ時分

彼女は母になる

母になることを望んではいなかったがやはり母になる

ほやける家族の輪郭は遠からず定まるだろう

夜の海岸を彷徨いながらこぼれた今日だけ一緒にいてよというピアノの音

は

押し寄せる黒々しい波のフォルテの音に縫り付くようにしながら

花びらの鼓膜を揺らした

ガザガサと荒れた私の手を取って暗い海の中へ入っていく

私たちがみたいなのが産まれちゃったら可哀そうじゃない だからあたしは子どもを作らないの
子どものために それって悪いことかしら

慈しむように詰るように最後の救いを求めるように
あなたが女だったなら良かったのに
このピアノの音だけは一生消えないとすぐに悟った
もう喉元まで海に浸かっている

カーネーションが溢れかえる時分

彼女の腹はひとつの命分大きく膨らんでいた

去年よりも厳しくなった日差しが夜の海の黒さをしたアスファルトを焼く

カッカツと小気味よい白杖の

傍

をヤクルトレディが通り過ぎる

揺れる俯瞰

おぼつかない足元

脱力する肢体

今日は

母胎に赤いカーネーションの花束を

Father's day

向日葵に蜜蜂がとまる時分

傷だらけのレコードから高らかに芽生える生の息吹

ヨヨ 彼は父親になったよ

靴紐 の 結び方も知らなかったのに

足並みを揃えられない彼にとって

学校はいつも苦しそうだった

裏声と地声が交わる祇園の青春通り

踏まれ削られ

ずる剥けになった踵からぼたぼたと流れる血

色素の薄い透き通った肌とのコントラストが

年不相応な艶めかさを彼に備えさせた

傍らで悶え苦ししながら血を流し続ける無垢な少年

女たちはこぞって愛した

狂ったように血を啜り

慈愛の心を少しずつ胸に育てた

ベイビーズブレス 帳の中で

不浄

そんな馬鹿な女の一人だった

向日葵が枯れはじめる時分

瓦屋根にあったはずの蜜蜂の巣はいつのまにか消えていた

炎天下 第二小学校の正門からこぼれ聞こえるチャイムの音に

知らない誰かのノスタルジーを重ねる

ねえヨヨ 母が思うにだけどね

女は徐々に母になり 男は突然父になるのよ

向日葵色のパイン飴が溶けるころにはもう さよなら少年

雨の日の小休止

ベッドで寝たきりの生活に

雷の轟音がきっかけを与える

ふつつ湧いてくるマグマを見て見ぬふりするのは限界
例えば

雨でぬれた地面に右足の裏側全部を付着させたい

まずはかかとからチョンと

足全体を反らせて

腹は徐々におろしていく

じわじわと皮膚内に染み込んでくる不快感

指先は雨空に向き

握り殺すように

強く強くつかむ

その間も止まない 雷鳴

足首をやわらかく使って今度は側面をこすりつける

最も小さい指がつぶれる感覚を堪能しながら

翻して親指の側を下にする

親指の骨は小指のそれにくらべて頑丈だから

骨密度の高さに阻まれて水は浸透しにくいような気がする

つまり土踏まは水付かずでもあって

足の親指と小指はどうやってもくっつかないことを知った刹那
はっと息を呑んだ

病院の目の前に駐車してあった車に雷が降ったのだ

まだ誰にも発見されてないこの世の真理に一つ到達してしまったような
そんなきっかけ

逸脱なかま

あなたの山手線は周回遅れね

シャトルランみたいに加速し続けるスタンダードに追いつくことが急に苦しくなった

電車は三分間隔でホームに滑り込んでくるようになったのにどうして間に合わないのでしょうか

ハチ公前の雑踏の中で文庫本を読む女に問うた

いいえ、三分間隔で来るようになったから遅れるのですよ

女が目落としているのは村上春樹の「中国行きのスロウボート」

「存在X」に追われている

「存在X」は複数——無限にいますので切っても切っても絶えず湧き出る

一貫性がないことだけが一貫している

二番線から出るこの時間の列車を逃してしまえば僕は置いてゆかれる

三分後に同じような列車がまたくるのにですか

女は皮肉な微笑をたたえている

「存在X」のもっともいやらしいところは善意の顔をして近づいてくるところだ

一度心を許してしまえば最後 すべて吸い尽くされる

次に来る列車がどこの向かうのか知らない

知らないけれども

これ以上遅れることへの恐怖と

みなと同じ車両にいるという安堵から

気が付くと今日もまた白線の内側に並んでいる

それでもずっと誰かに言っただけだった

ずっと待っていた

あなたの山手線は周回遅れね

私もよ



詩集 Bouquet de poèmes

著者 吉田健人

発行日 二〇二四年二月五日

